至難とされ、從つて園太曆の刊行は度々計企された事もあり、久しい以前から今にも公刊さるゝやに言はれたが、底本の作製容易ならざるために、今日に及んだ。

所が續群書類從の刊行を完成して幾多の經驗を積まれた太洋社の太田藤四郎氏は敢然園太曆公刊の難事業を企て計畫以來多年の苦心と困難打破の結果、いよ〳〵實行され、近く其第一卷が發行さるゝに到つた。本卷には最初に應長元年二月三月の神田本の正本をそのまゝに收め、それから康永三年正月から貞和二年五月までを纒めて居る。其の初めに收められた應長元年二月三月の一卷が上梓された事だけでも非常な慶事であり、これによつて園太曆の正本と抄本とが、どんな關係になつて居るかを充分に比較研究する事が出來るであらう。そして比較すれば、正本の全部が現存したら、どんなに難有いだらう、としみ〴〵と思ふのは、吾人のみではあるまい。更に引續いて公刊され全部で五冊になる豫定と聞く。

校正は、曩に京都帝國大學に職を奉ぜし時より園太曆の研究に意を用ひつゝあつた現史料編纂官の岩橋小彌太氏が當られてから全く安心する事が出來よう。

幾多の新知見がやがて本書から現はるゝであらう。東京市豐島區池袋二丁目一〇〇八、太洋社發行、一冊豫約價四・五圓〔中村〕

○書紀集解　卷上

——國民精神文化文獻第五、首卷共四分冊の中——

河村秀根著

最近、我國民精神文化史上特に貴重なる史料の複製複刻を企て學界に多大の貢献を爲しつゝあつた國民精神文化研究所が、先に公刊の運びとなつた「日本書紀纂疏」のあとを追ひ、「國民精神文化文獻第五」として新らしく世に贈られたのが本書である。

著者は通稱を復太郎、號を葎菴と云ひ、享保八年尾州藩の國學者河村秀世の次男として生を享け、福本八十彥多田義俊等の神道國學者に師事して、藩學天野信景、吉見幸和の學統を繼承祖述した碩學である。延享、寛延の頃、兄秀穎と共に「日本書紀撰者辨」「神學辨」「神祇令集解」の大著を編述して夙に學名を馳せてゐたが、その後間もなく日本書紀註釋本の編述を志し、之に從事する事三十有餘年、天明の初、年六十三にして此の偉業を完成したのである。（國民精神文化、二ノ一、吉田三郎氏、「河村秀根とその遺著」、參照）。

本書は書紀及び國學研究上缺くべからざる史料である、がその複刻公刊の事は、同研究所々員西田直二郎博士、同助手中村光氏同吉田三郎氏等の苦心の手になるものであつて、從來の流布本天明五年の木版刊本を底本とし、現在市立名古屋圖書館に所藏せらるゝ著者自筆稿本を參照して校合したものである。

現今世相の上に著しく「焦燥の氣」みなぎり、「動もすれば根底なき大言壯語を喜ぶ風」がみられる時、同研究所が「靜かに古典の精神を學び、篤厚の氣運を醸成」せん事を意圖して本書を刊行せられた事は、學界、又廣くは國民と共に喜ぶべき事柄であらう。（東京、國民精神文化研究所發行、洋裝菊判、四〇一頁、非賣品）（内藤）

○高野山文書　第五卷（金剛三昧院文書）

昭和七年四月、弘法大師一千百年忌遠忌を記念せむがために眞言宗曠古の事業として企劃せられたものは、今その完成を遂げつゝある眞言宗全書の刊行と、他は高野山史編纂所の開設であり、茫々千百歳に餘る一山興亡史の撰述にあつた。爾來四星霜、今その事業の基礎的工作として一山史料のあらゆる視野からの集大成を見るに至つた事は學界近時の鴻擧として、その不撓の聖業に心からなる慶祝の意を表したい。蒐むる所、十八萬餘通の中、約六千餘通を嚴選の上、一山各院文書八卷、舊寺領内文書四卷に種別せられ、全拾貳卷を算する浩瀚なものである。

もとより今次の刊行は曩の正續寶簡集に亞がむとせるものであり其を補はむとするものであることいふまでもない。その文書の配列に於て曩の大日本古文書に則りて「家わけ」別を採用せられる等、その内容體裁のすべてに於て前者に準じられたるは誠に賢明の策といふべく研究に利便せらるゝ所が甚だ多い。曩の大日本古文書「家わけ第一」に收められたるものが主として御影堂寶庫を中心とせるものなるに反し、廣く一山各院の祕庫はもとより、普く全國に誇る舊高野領内にまでその採訪の手を差し延べ、以て資料蒐集の完璧を期せられた所に今次刊行の重大なる意義が考へられていゝであらう。

初回に配本せられた金剛三昧院文書には同院所管に係る御經藏文書、六卷書文書、畠長藏文書、校倉文書等、計三百八十二通が收錄されてゐる。いふまでもなく當院はその草創の當初より源家とは特別の關係を有ち、秋田城介時顯自筆寄進狀を初め足利歴代將軍の御教書類等その兩者の關聯を示すもの多く、その所領、筑前粥田庄、播磨在田上庄、紀伊由良庄、攝津小眞上庄等その寺領庄園に關するもの又多い。而も當院は夙に勸學院として一學侶方の柱石としてその重きをなし、證道上人、興山上人應其等一山中興祖師の資料等又豐かである。不幸屢々の祝融に禍されてその原本の大半を失へるは誠に遺憾といふべきも今纔かに殘る原本に手寫を交へて本書の上梓を見たことは慶ばしい。とまれ、報はれざるこの種事業の前途こそ誠に洋々たるものがある。折角黽勉その完成の完からむことを切望する次第である。（菊版四六一頁、圖版四、高野山金剛峯寺内高野山史編纂所發行、價各册、五圓宛）（濱中）

○日本史學史

伊豆公夫著

「日本史學史」それは現今我國史學の領域に於て、確かに注目す